The Japan Association of College English Teachers (JACET)

「発信型英語表現へのプロセスとしてのマンガの効用」

東洋女子短期大学　助教授　　久富節子

英語授業の改革が多くの大学で行われ、コミュニケーションに重点を置いた方針をうちだしている大学も増えているようだ。しかし、いざ実際に「発信型」の授業を行おうとしても、日本人教師がフルに活用できる教材も限られるし、どういうプロセスを踏めば成果があがるのか等、未知の要素は多い。

《コミュニケーション能力とは？》

本来コミュニケーション能力をつけるということは、単にスキルとしての表現力を磨くことではない。それは物事に直面したときに自分の力で考え、内容をことばに置き換えて相手に伝え、相手の立場や主張を聞きながら両者の間に存在する要素を調整して、より良い結論へと方向づけることのできる能力なのである。言い換えれば「ことば」という「媒介物」によって自己と他者との関係をきたえあげることである。この「媒介物」としてのことばが、母語ではなく外国語であるとやっかいなことになる。自己を写し出す便利な「媒介物」であるはずのことば自体が、めんどうな荷物となって存在してしまうのである。このめんどうを軽減してくれる仕掛けが『漫画人』には満載されている。つまり、日本語のニュアンスまでしっかり取りこんだ百パーセント信頼に足る英語表現が、漫画という視覚的コンテクストとともに読者に与えられるので、読者は日本語と英語との間を自由に往き来できるのである。

《コマ割りの特性》

（１）ディスカッションへのプロセス

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

教室で討論などしたこともない学生たちに、いきなり意見を出させることが不可能なのは、現場の教師なら周知の事実であろう。ここで、教授段階のひとつとして、マンガの持つ「コマ割り」の性質がおおいに役立つ。学生はそれぞれのコマの中で、①何が起こっているのか、②それぞれの登場人物はそこで起こっている事柄をどう受けとめているのか、③学生自身はこの内容をどう解釈し、どう感じるか、という三つのレベルからそれぞれのコマについて記述する。前に述べたとおり、『漫画人』の英語の解説は、非常に詳しく、しかも日本語に並記されているので、学生は「ああ英語ではこう言えばいいのか」と納得しながら各コマごとに三つのレベルを整理できるようになる。一応の区切りがついたときに教師は進行役として各自の書いたものを発表させる。またマンガが本質的に内蔵している「人間の本音を描く」という要素は、学生をディスカッションへと導く動機づけにも好都合である。学生たちは各人の解釈のバラエティの多さに驚き、しだいに積極的に自分の意見を皆の前で示せるようになる。

（２）ロールプレイによる英会話練習

マンガは、現在動きつつある大衆社会の姿をリアルタイムで描いていることから、学生に「この表現を使ってみたい」と思わせるチャンスも多い。この特徴を利用し、学生を各コマの登場人物に割り振り、ロールプレイを行わせる。友人どうしのペアワークとしてさせれば恥ずかしさも薄れ、むしろマンガのキャラクターに変身することを楽しんでいるようでもある。また、マンガの中での会話表現が自分と友人の口を経て、英語で何度も出てくることにより、必然的に生きた英会話表現の訓練の場になる。

いま私たちの周囲では、多文化化と相互依存の必要性が現実のものとなり、日常生活にまで入り込みつつある。リアルタイムの社会の動きについて、英語で自己表現できる可能性を秘めたこの雑誌が、先生方のアイディアあふれる指導のもとでおおいに活用されることを期待する。

NII-Electronic Library Service